NO.83
神奈川大学　国際経営研究所　編集・発行 2025.12.01

# 国経研だより No.83

国際経営研究所
〒220-8739 神奈川県横浜市西区みなとみらい 4-5-3
みなとみらいキャンパス 11007
TEL 045-664-3710(内線 4100)

Institute of International Business Management

Contents

P.1-2　くにの話／知花　愛実
P.2-3　「研究者にとっての日常の再認識：国際経営論の基本前提である国境を越えることの意味を考える」／徐　寧教
P.3　ソーシャルデザインキャンプ開催報告／中見　真也
P.4　ビジネスプランコンテスト 20 周年に寄せて／田中　則仁

## くにの話

知花　愛実

2024 年度は国内研究の期間を頂いた。それについての寄稿依頼だったがネタがあまりないので、最近思い返したことを書き、共有したい。先日講義の中で「あなたのお国はどちらですか。How do you identify yourself? What factors “prove” who you are?」と問いかけ、それぞれの国の ID を比較して議論をした。中には多重国籍を持ちパスポートを使い分けている学生もいる。そのような学生らとのやりとりの中で思い返した旅の思い出話である。

10 年以上前、旅先でスリに遭いパスポートを無くしたことがある。その夏、当時住んでいたハワイから友人の故郷である東ティモールを訪れた。東ティモールは 2002 年に独立した比較的新しい国だ。友人の実家で約 1 週間お世話になった。滞在中温かく迎え入れて頂いた傍ら、ご家族に起きたサンタクルス虐殺のお話を伺い、墓地を訪れた。また別の友人はインドネシア軍占領下、人身売買された後、あらゆる虐待に耐えながら従軍中の海外派遣の際に逃げ出し難民となり、東ティモールの独立運動を続けた想像を絶する半生を語ってくれた。東ティモール出身の友人らは弾圧政権と国軍、石油開発、コーヒー畑と「未開発」の風景に囲まれて育ち、よりよい教育を求めハワイやオーストラリアの大学へと留学し、帰国後自分たちの国をたてるために一生懸命だった。彼(女)らが見せる国への熱い想いに触れた。短い期間だったが多くを学び、訪れてよかったと心から思った。

テトゥン語で「私たちの国に平和を、ティモールの皆に平和を」

その後、バリ島を経由して日本へ帰国する予定だったので、バリにも数日滞在することにした。大阪から合流した友人と共に、初日はバリ人の友人に案内してもらいながら、島をまわった。ティモールとは一変したザ・観光を堪能した後の最終日、空港に向かう前に寄ったウルワツ寺院で事件は起きた。屋台が並ぶ人混みを抜けタクシーに乗り込んだ後、カバンの口が半分空いていて財布がなくなっているのに気づいた。最悪だ。普段は小分けにして持っていた貴重品だったが、この時に限って搭乗手続きで取り出しやすいようにとすべてまとめていたのだ。ゴッソリ無くなっていた。日本人観光客の女の子たちは狙いやすかったのだろう。パニックに陥りながらもとりあえず空港

に向かった。ひとまず友人から現金 1 万円を借り、帰りの便が違う彼女を見送った。

それからが悲惨だった。パスポートを含む ID がないことは、帰りの飛行機に乗れず、銀行からお金を取り出すことができず、延泊の部屋を借りることもできず、そこらで襲われても、野垂れ死にしても、誰も私が何者かもわからないのだ。日曜日だったその日は日本領事館も開いていなかった。たまたまティモールからバリに来ていた友人のおかげでクタの安宿に泊まることができた。その夜は 2 リットルの水とカップラーメン、鍵が壊れた部屋で眠れずに過ごした。翌日、万一のためにインドネシア在の友人の電話番号のメモをポケットに入れ、同情した前日のタクシードライバーに警察署に連れて行ってもらった。方言を通訳してもらいながら盗難証明書を発行し領事館へと向かった。しかし一時的な出国証明書を発行するのにもお金が必要だった。一文無しで自分が誰かを証明することもできず、助けを求めに来た学生がどうやってそのお金を準備するのだろうか、腹が立った。結局、手を差し伸べてくれた人の優しさと無料 wifi に救われて家族に連絡ができ送金してもらい、数日後には無事出国できた。沖縄に戻ってからまたハワイでの新学期に間に合うよう急ピッチでパスポートと米国のビザ申請をした。

タバナン警察署前で盗難証明書をもらって一安心？

この一件以来パスポートの取扱いには特に気をつけるようになった。それまでパスポートで証明される国籍に不満も特権も感じることはなかったが、言葉の通じない土地で国籍を持たないということ、難民、不法移民、無国籍者や国境が持つ意味について考えさせられる旅となった。世界のあちこちでナショナリズムが席巻する近年、パスポートが必要なくなる時代はくるのだろうか。

（所員／ちばな・めぐみ）

---

## 「研究者にとっての日常の再認識：国際経営論の基本前提である国境を越えることの意味を考える」

徐　寧教

2024 年 8 月から 2025 年 8 月まで、スペインのセビリア大学、そしてイギリスのノッティンガム大学に在外研究員として派遣された。海外で新たな研究に触れて、自分の研究を現地の研究者とともに進めることができた。また、その過程で感じたのは、海外で日常を一から組立てるときの大変さ、日常の大切さだった。

研究活動も報酬をともなう時には一種の労働となる。そして、労働力というものには、限界があり、それを使い果たしてしまうと労働者たる人間は休息をとり、労働力を再生産しなければならない。また、同時に自分の身の回りの家事なども処理していかなければならない。労働、家事、休息、そしてほかにも様々な要素から、我々の日常は成り立っており、それらとともに日々の時間が流れる。言い換えれば、日常生活がみだれるということは、そのなかの要素たちが乱れていることと言えるだろう。在外研究員として海外に行って、私が感じたのは、まさに日常生活を送ることと研究の関係性だった。

この 1 年間、日本からスペイン、スペインからイギリス、そしてイギリスから日本と 3 回国境を跨いだ。その都度、居住登録、外国人登録カード発行などの役所仕事や荷解き、荷物整理、収納、

家具・什器の買い物、家の掃除などの雑務に翻弄された。時差ボケもあるので、最初は眠ることもままならなかった。体は疲れているのに、眠ることができず、やっと眠ってもすぐ起きてしまった。

とにかく落ち着いて本や論文などを読んだり、ものを書いたりする時間が足りなかった。本来なら、研究の合間を縫って雑務を処理するべきだけど、なかなかそうもいかない。数週間もすれば、なんとか新たな日常を送ることができたが、これは日常を取り戻したとは言えない感覚だった。新たな生活ルーチンをゼロから設計して、トライアンドエラーを繰り返す感覚に近かった。

もちろん日本においても引っ越しなどをすると、最初は落ち着かず、日常を取り戻すのに時間がかかる。しかし、海外では、それがもっと時間と労力を要するものになってしまう。決定的な違いは、やはり「国境を越える」ことにあると考える。言語、文化、習慣など、なにもかもが違う国で日常生活を送ることの難しさを実感した。

私は「国際経営」という分野を専門にし、学生にも教えている。そして、国際経営という経営学の分野は、国境を越えることで発生する様々な問題を企業がどのように管理するかについて研究する学問だと教えてきた。今回の経験を通じて、「国境を越える」というのは、どのような意味を持つのかを再認識した。国境を越えることは、企業にとっても研究者にとっても、単なる移動ではない。新しい日常を再構築するという行為そのものが、国際化の本質なのだと感じた。

（所員／そ・よんきょ）

---

## 2025 年度国際経営研究所 横浜みなとみらい学センター 主催
## 「横浜みなとみらい地区の地域活性化」ソーシャルデザインキャンプ第 2 期の開催報告

中見　真也

2025 年 4 月に開設された横浜みなとみらい学センターでは、「横浜みなとみらい地区における産官学連携を踏まえた上での地域活性化に関する学際研究」（代表・中見准教授）の一環として、昨年度に続き、8 月 27 日（水）～8 月 29 日（金）の 3 日間、神奈川大学みなとみらいキャンパスにて、学生を対象としたソーシャルデザインキャンプを実施した。

本キャンプの実施目的は、横浜みなとみらい地区のプレイスブランディングを検討し、「学生」目線でまちづくりを構想し、地域活性化を考えることにある。

昨年度に続き、立教大学名誉教授中村陽一氏、マシュー建築事務所 松原氏、田中氏のご協力の下、本年は、①「子供たちの遊びの空間を増やす」、②「みなとみらいの住民にシビックプライドを持ってもらう」という 2 つの社会課題を解決するための提案活動に取り組んだ。

本キャンプを通じ、学生たちは、普段自分たちが学生生活を過ごしている神奈川大学みなとみらいキャンパスのある横浜みなとみらい地区について、「ウォークショップ」という体験型の手法を用いて、これまで気づかなかった街の良さ、人の動き等を自分の目で観察し、横浜みなとみらい地区のプレイスブランディング、シビックプライド醸成に繋がる貴重な示唆を体得し、具体的な提案活動に繋げられたのではないか。

ウォークショップ後の各グループ発表

今後も本活動を通じ、横浜みなとみらい地区において、産官学連携で、横浜みなとみらいの地域活性化に貢献できるよう、学生たちと一緒に考え、実践していきたい。

（所員／なかみ・しんや）

## ビジネスプラン・コンテスト 20 周年に寄せて

神奈川大学名誉教授 田中　則仁

2025 年 11 月 8 日に第 20 回目のビジネスプランコンテスト（以下 BPC）が開催された。経営学部 3 年生の 10 チーム 55 名が参加し、事業計画、財務計画を発表して、その新規性や社会的意義性を競った。

BPC で取り上げる課題は多岐にわたっている。あれば良かった、無くて困った事を課題にして、その解決方法を考えてきた。10 数年前に、あるチームからは宅配便の受け取り方法を改善する提案があった。当時から宅配便を届けても、受取人が不在であることが社会問題になっていた。受け取る側も、仕事で不在にしていて、日時指定ではあっても緊急の用事で不在にならざるをえないこともあった。そこでコンビニエンスストアや指定の場所で、宅配便を受け取ることができれば、宅配業者にとっても、受け取る側にも便利な仕組みができるとの提案があった。今では宅配便ロッカー、PUDO ステーションとして実現している仕組みである。

また別のチームでは、スマートフォンの充電が、ケーブルなどの備品を使用せずに装置に置くだけで充電できる非接触型のワイヤレス充電を提案していた。こちらも今でこそ最新のスマートフォンには標準装備の仕組みであるが、10 数年前にはまだ発想段階の、「あれば便利」な仕組みであった。実際、ワイヤレス給電の国際標準規格 Qi が整ったのは 2008 年である。

これらのアイディアをみても、学生チームの発表には、社会の動きや課題を先取りした発想が少なくない。社会全体あるいは世界を見渡すと、同時期に同じ事を考えている人々は相当数いるといわれている。仮に世界中で、100 人の人がそのアイディアを思いついたとして、実現に向けて本気でそれに関わる人は 10 人、さらのそれを商品化して成功する人は 1 人である。そう考えると、学生チームの面々にも、もう一息粘って欲しかったとの思いもある。

BPC のもう一つのねらいは、企業家精神の育成である。企業家精神、アントレプレナーシップは、必ずしも経営者だけに限定されるものではない。むしろ組織の一員である一人ひとりの心掛けという課題である。組織のメンバーではあっても、自分が責任者ならこうする、経営者であればこうしてはどうだろうかと建設的な発想で提案する心構えを持つことが大切である。

BPC を契機に、社会で活躍する学生諸君が、社会課題を見つける着眼点、解決方法を考える能力、さらに企業家精神を持つ一人の組織人として社会人基礎力を身につけて欲しい。最後に、平塚信用金庫の皆様には、専門家の立場から学生チームの発表を審査して頂き、理事長賞を通じて後援して頂いたことに深く感謝申し上げます。

YouTube 公式チャンネル　神奈川大学経営学部ビジネスプラン・コンテスト
https://www.youtube.com/channel/UCbKY4uS7ldkAajEh oKr8jw
**2021年以降のコンテスト動画がすべて、いつでも見られます！**